



はて？ 自分の無意識のバイアスに気付く

校長 横枕 耕史

今年の夏は、パリ 2024 オリンピック・パラリンピックが開催されました。私はリアルタイムで感動を味わいたいために時差のあるテレビ放送を眠い目をこすりながら視聴しました。画面の中の躍動する選手の姿に、一喜一憂しながら応援していると、ふと「はて？」と疑問が湧きました。報道される内容は、メダルの数や順位に焦点を当てがちですが、地上波テレビで放映されない種目やメダルに届かなかった選手の報道が極端に少ないことに気付いたのです。

オリンピック・パラリンピックという晴れ舞台に出場すること自体が名誉であり、何物にも代えられないものです。全ての選手たちが計り知れない努力や犠牲を払ってきたはずで、彼らの挑戦や精神力、特に困難に立ち向かう姿勢こそ、スポーツの本質であり尊敬に値するものだと考えます。しかし、私たちは、商業主義的な利益も踏まえた報道メディアの情報を通して、事実から切り抜かれ加工編集された**バイアス(偏り)**が掛かった一部の情報を「**無意識**」のうちに視聴してしまうことが多いのです。

この「無意識」は、私たちの生活の中に当たり前存在しています。誰かと話したり接したりするときに、これまで自分が経験や見聞きしたことに照らし合わせて物事を決めつけたり、思い込んだりして判断することが多くあります。現代では、この**無意識の思い込み**を「**アンコンシャス・バイアス**」として捉え、誰もが生きやすい多様性共生社会に向けて様々なことを考えていこうという流れがあります。

例えば、学校の例をあげると、男子生徒は強く逞しく、女子生徒には清楚でお淑やかで優しくあれ。男子生徒は理数系、女子生徒は文系が得意。なんとなく、男の子は青で、女の子はピンク。男子生徒は力仕事、女子生徒は事務作業。また、血液型や学校、職業などから「この人はこういう人だ」と判断してしまったり、

「男の先生は怖い」、「どうせ自分には無理」と思ったり、「～に違いない」「～しなければならない」と思ったり、「普通～でしょ!」「何でこうしないの?」と思うなど、性別・先入観・固定概念で決めつけていることがあります。私たちは、誰もが無意識に思い込みや先入観で、あらゆるものを自分なりに解釈し、偏ったモノの見方でゆがんで認知し行動しているのです。

明確な根拠もなく、いつの間にかそうだと思い込んでいる不公平な考え方であるアンコンシャス・バイアスは、少なからず、生徒、教員、保護者、地域社会、どの人の中にも存在し、周りの人との関わりの中でも見つけることがあると思います。それに気付くことで、**不公平な思い込み**を減らし、誰もが過ごしやすく生きていくことができるのではないかと考えます。

そのためには、まず、自分自身の思考や感情、行動のパターンをよく観察し、**自己認識を高める**ことが必要です。自分がどのような先入観や偏見を持っているかを意識し、それがどのように日常の意思決定や判断に影響しているかを見直すことで、よりバランスの取れた見方ができるようになります。また、自分とは異なる多様な人に対して、**オープンマインド**で偏見をもたず、**他者の意見や考え方を尊重し対話**をすることが大切です。そして、SNSやインターネットを含め入ってくる情報は、その真偽を**批判的思考で冷静に判断**することが重要で、**意図的に多様な視点(相手の立場)**から情報を集めることも大切です。

生徒を含め私たち一人ひとりが、多様性や公平性の大切さ、異なる考えを尊重し、その背景に思いをはせ、目の前のアンコンシャス・バイアスに自ら気付き、それにスマートに対処していく力が身に付くように社会全体で意識改革が進んでいければ、誰一人取り残されない思いやりのある理想の社会に近づくことができるのではないのでしょうか。